〔翻訳〕

学習しょうがいのある青年のための地域ケア（その６）
－青年達の想いをもとに－

Janice Sinson 著

和泉とみ代　橋本由紀子　藤本 祐司 訳*

〔翻訳にあたって〕

本論は、イギリスにおける学習しょうがいのある青年への教育とその後の地域生活の実態について、ウェンドウッド校卒業生、家族、グループホーム職員を対象に面接調査を行ったものである。この報告は、彼ら自身の言葉で話し、彼らの目を通して見たり感じたりしことがそのまま述べられている。本論までの（その１）、（その２）では、グループホームで暮らすウェントウッド校卒業生やその家族、スタッフへのインタビュー内容を紹介し、（その３）、（その４）では、自宅で暮らすウェントウッド校卒業生やその家族、キーワーカーへのインタビューを通して、グループホームや自立生活をする人に比べ、ウェントウッド校卒業時に習得していた生活スキルを失う傾向が多く、その原因での１つとして親の愛情が時には過保護や過干渉という形態で現れることが述べられていた。（その５）では、仕事を持ち、自立生活をしているウェントウッド校卒業生やその家族、キーワーカーへのインタビューを通して、お役所仕事への親の不満や心配、しょうがいのある若者や親がワーカーを信頼し頼っていること、また、通勤などの移動性は高く、一人で公共交通機関を使って通勤できていること、一番困難なのは金銭管理とおつりの計算であることが述べられていた。

本論（その６）では、ウェントウッド校卒業生が就労に関して自信を持ち、非しょうがい者と同様に仕事をこなしており、ウェントウッド校の献身的な指導がなければ不可能であったであろうと、親達は一様に語っている。また、周囲の人たちは学習しょうがいのある青年たちへの配慮をしているが特別扱いはしていないことが明らかになった。しかし、金銭管理に関しては、当事

＊ Tomiyo IZUMI　香川短期大学教授、Yukiko HASHIMOTO　吉備国際大学教授、
Yûji FUJIMOTO　四国学院大学大学院社会福祉学専攻。

者とスタッフとの間で認識の差があることも明らかになった。

原著は、Jenice Sinson, *Care in the Community for Young People with Learning Disabilities－The Client's Voice*, Jessica Kingsley Publishers Ltd. London, 1995である。

橋本 由紀子

凡例

1．訳文の書体は原著の表記にしたがっている。

2．面接部分の斜字体は面接者、標準体は被面接者である。ただし、被面接者が２人以上の場合は、サービス利用者の回答を太字で、その他は標準体で示している。また、強調部分を太字で表している場合もある。

仕事についている人

金銭管理

ニック

ニックは25歳でＩＱは41、非常に良いコミュニケーションスキルを持っていた。彼は10人きょうだいの１人で、実家で暮らしている。インタビューでは、金銭管理と仕事が１つの問題として取り上げられた。

あなたはウェントウッド校を卒業後、２年間カレッジへ行き、それから青年訓練コースを受け、そして今は働いているのですね？ **はい、庭師をしています。**

母親：息子は青年訓練コースの一環として園芸を勉強しました。今は正式な仕事として働いています。

給料はもらっていますか？ はい。*毎週、週末にもらっていますか？* はい。*いくらもらっていますか？* **108ポンドです。**

母親：２週間分です。息子は扶助をもらえません。息子が仕事を始めたら、扶助を止められました。どうして止められたのか私には分かりません。*扶助を止めたのは誰ですか？* 私に聞かれてもわかりません。でも誰かが何かを言ったんでしょう、そうなったのです。

もし実家に住まなかったら家賃を払わなくてはなりませんね？ **はい。**

母親：実家に住んでいなかったら扶助を支払ってくれたでしょう。でも、息子は私たち親の家で暮らしています。だから無理です。子どもたちが成長するまで面倒を見るのはかまいません。しかし、子どもが成長してある時期に達すれば、行政が何らかの準備をしてくれだろうと考えています。もし、施設で暮らせば、社会サービス省から多額の費用を支払わなければなりません。それはばかげたことです。息子に近くの施設で住んだらどうかといってきました。 *でも、ニックは家を出たくないのでしょう？* はい、私も息子に家を出て欲しくありません。

週給54ポンドのうちいくらかお母さんに渡しますか？ **はい、全部です。** *では、いくら自分が使いますか？*

母親：息子は25ポンドだけ私に渡します。そしていくらかを休日の旅行のために貯めておかなければなりません。息子は25ポンド自分で使います。でも私は息子に全額を渡しません。無駄遣いをしたり失くしたりしてしまうからです。息子はよくものをなくします。だから私がお金を管理して、息子が欲しい物があるときにお金を渡します。小切手が送られてきて、息子は郵便局に行きます。１人で行って現金に換えます。

パブでコーラはいくらしますか？ **60ペンスくらいです。** *いくら持ってパブに行きますか？* **２～３ポンドです、時々５ポンド持っていきます。**

あなたは息子さんに25ポンドだけと決めているのですか？ ディスコに行く時はもっと多くかかります。*週末が来る前に全部使い切ってしまうことはあるのですか？* 25ポンド以内で収めらないことが多いです。私は息子に追加のお金は渡さないと言いますが、いつも使いすぎてしまいます。レコードやカセットを買ってしまいます。 *お金がなくなったとき外出しないように言いますか？* 時々週末まで貸してやることにしています。

ニック、お母さんにお金を返していますか？ **はい、いつも母に返します。**

もしお母さんと実家で暮らせて、ウェントウッド校で学んだことを活かせるなら、やってみたいですか？あるいは今のままでいいですか？ **ウェントウッド校で学んだことを活かしたいです。**

母親：息子はしっかりと仕事をします。朝７時半に家を出て夕方６時半までは家に帰ってきません。

サラ

サラは24歳、ダウン症のある思慮深い女性である。ウェントウッド校卒業時の成績はあまり良くなかったが、５年後にスキルを獲得し、ウエントウッド校卒業後の点数は対象者の中で優秀であった。サラの母親は発達しょうがいのある人々の教育や生活様式に関して強い関心があり、ウェントウッド校のカリキュラムに適した職業を見つけることができない人々のためにグループホームを運営していた。彼女は現在、すでに自立生活をしている人のためのグループホームを２つ運営し、３つ目をすぐに開設する予定である。グループホームでは土地の民芸品つくりや何らかの仕事に参加し、年齢に関係なく、勉強を続けている。住人は家事を全員でしている。

サラのインタビューの前に行ったスタッフへのインタビューを以下に述べる。

スミスさんは農業を営む傍ら肉屋をしていたが退職して肉屋をやめた。退職後６ヶ月で退屈し、何かやりたいことはないかと探していた。彼はこれまでにしょうがい者を雇用した経験がなく、訓練方法は試行錯誤で行ってきた。

しょうがいのある人を使うのは難しいですか？ そうでもないです。*肉屋で店員を雇っていましたか？* はい。*しょうがいを持っている人を使うのは難しいですか？* そうでもないです。しょうがい者の限界を理解しなければなりません。仕事に時間がかかり、準備にも時間がかかります。苗木を移し変える仕事をするために女の子を雇っていれば、中には上手にできる子もいます。サラはとても上手で、苗木を植えかえるのをあんなに上手にできる子は少ないです。３～400皿の苗床を作って売っています。とても手間のかかる仕事です。苗床に苗を完全に納めるのは難しく、常に監督していなければなりません。苗皿に印をつけておかないと、すべてに苗を埋め込むのは難しいのです。

まっすぐな列を作れますか？ 私は工夫をして苗皿に４つの穴をあけて、印をつけ列を間違わないように植えられるようにしています。*それで彼女たちはうまくできるのですね？* 皆ができるわけではありません。中には時間がかわっても、あまり仕事をしない子もいるし、あまり細かく考えない子もいます。ここでどれだけ時間をかけるかで仕事の上達が異なります。天気の悪い時もありますが、近くの修理工場でトローリーを貸してくれるので、それを使って苗床を売ります。

売れたら売り上げのいくらかが収入になります。

値段は安いのですか？ 少しね。苗床は市場より見栄えが良くないし不揃いなものもあります。そして植えかえる時に根をダメにしてしまうことがあるので24本のうち良いのは20本ぐらいですね。

金銭管理

サラのインタビューの間、スタッフの人たちが加わったため会話は驚くような内容になったので、後半部分しか記述していない。

サラは近郊の町だけではなく、バスでロンドンまで１人で買い物に行ったりする。サラはグループホームの友達と食事や買い物に行き、金銭管理は彼女ひとりでできるように見えた。サラのすばらしい能力からして、以下の会話はスタッフにとって驚きの機会となったが、筆者にとっては予測できることであった。サラの買い物の話を聞き最終的にスタッフの人たちは言葉もないほど驚いた。

サラ、給料日にはいくらもらうの？ **分かりません。**

スタッフ：いくらもらうの？ **25。**25何？ **ポンド。**さあさあ、あなたは明細書にサインするでしょう、金額が書いてある明細書に。

サラ：**はい、でも私はいくらか分かりません。**

スタッフ：あなたは12ポンド50ペンス受け取るでしょう。私は個人的に説明しましたね。私たちは毎週1人につき12ポンド65ペンス渡していて、そのうち15ペンスは年末のボーナスになるように貯金し、みんなそうすることは良いことだと合意していました。みんな毎週12ポンド50ペンスもらって、そのうち15ペンスを毎週貯金して、年末が来たらボーナスを受け取れるようになっています。

そのお金は郵便貯金通帳に入っているの？

サラ：**分かりません。**

あなたは土曜日お給料を受け取った後どうしてますか？ **郵便局へ行く？** *もし服を買うお金が欲しいときどうしますか？* **郵便局へ行きます。**

サラ、土曜日にお給料の12ポンドをどのような形で受け取りますか？ どのような形ですか？（しばらく沈黙）**えーと。** *あなたは今日持っているでしょう？* はい。*今日持っているのはどんなお金？* **ポンド紙幣です。** *何枚ですか？* **５ポン**

ド札１枚です。 *これはいくらの紙幣？* **５ポンド紙幣です。**

スタッフ：これは10ポンド。サラ、10ポンド紙幣よ、分かりますか。

サラ：（自信なさそうに、でもスタッフを喜ばすために）**はい。**

スタッフ：彼女らは自分で通帳を持っていて、私たちが毎週チェックします。そして、ちゃんといくらもらったか書きとめ、いくら貯まっているか分かっています。もし、時間をかけて書いてゆっくり計算すれば、実際にいくら使ったか分かります。でも、時間がかかります。お店のカウンターですぐに計算するのは無理です。

貯金通帳はどこに置いてありますかサラ？ **寝室です。**

土曜日の給料日にあなたは買い物に行ったけど、どこへクレヨンを買いに行ったのですか？ **スミスという店です。** *いくらかかりましたか？* **だいたい１ポンド50ペンスです。** *お給料の12ポンド50ペンス全部もって行きましたか？* **はい。**

他に何を買ったのですか？ **カレンダーです。** *いくらしましたか？* **12ポンドくらいです。**で、*そのほかに何か買ったのですか？* **消しゴムです。** *レジへ行った時、お金は足りましたか？* **はい、えー、私は幾つかの品を返さなければいけませんでした。** *そうですか。何を返さなくてはならなかったの？何が買えなかったの？* **カセットテープです。**

あなたはバスケットに入れた商品を返さなくてはならなかったの？ **はい。** *レジへ行った時、合計金額が自分の持っているお金を超えていましたか？* **はい、私はカセットテープとカレンダーを返して、残った２本のペンを買って、お釣りをもらいました。** *お釣りはいくらもらいましたか？* **コインが１個か２個。** *このような小さな茶色いコインでした？* **はい。**

たくさんの人が後ろに並んでいましたか？ **はい。** *その人たちは待たされていたわけね？* **はい。** *待ってた人たちは怒っていた？* **怒っていない人もいました。** *ということは、何人かは怒っていたのね？* **はい。** *何か言われましたか？* **それは別に構いません。**

あなた自身が品物を返しに行かなければならなかったの？ **いいえ、店員さんが返してくれました。**

レシートを持ってきましたか？ **はい、財布に入っています。** *お金を全て使いましたか？* **はい。** *来週の土曜のお給料日まで待たなければならないのね？* **はい。**

外出の時バスの往復チケットを買いましたか？ **はい。** *あなたは無事家に帰ってこれたのね？* **はい。**

サラは金銭管理に関して困った時の話以外は、はっきりと考えて話していた。彼女は、情報誌を読み、物語を書いた。さらに、庭仕事や工作を楽しんでいたが、スミスさんが言ったように、彼女は熟練者のように仕事ができた。サラが仕事をしながら生きるという生き方を選択し、生活状況に自らが懸命にアプローチをし、とてもハッキリした精神的態度をとっている姿を（その４）で描写している。彼女は、他のしょうがいを持つ人たちに比べると明確に発言していた。

考察

親達は、特別支援学校に通っていた子どもたちが、ウェントウッド校を卒業し仕事ができるようになるとは思っていなかった。親達は、ウェントウッド校を卒業して自宅に戻ってきた子どもたちを見て、仕事ができるような能力を身につけただけでなく、仕事をすることが一般的だと考えられるようになったことに驚いた。そして、子どもたちに就労への自信を持たせてくれたウェントウッド校のカリキュラムに感謝した。親達は、繰り返し、専門家の丁寧な１対１の対応がなければこのような進展はなかっただろうと話した。

あるダウン症の女性は進学や更なる学習が疲れると回答した。いったんは仕事に就き、能力の範囲内の仕事であったが、急がされ、きつく騒がしい環境が嫌だと話した。本調査の範囲外ではあるが、ダウン症の女性のほうが男性よりも程度に差があることが判明した。彼女らは、職場近くの環境、都市の中心、混んでいるスーパー、成人訓練施設でさえも居心地が悪いと述べた。本研究の対象者であるダウン症の女性の発言から、筋肉の衰えが早く、即答が苦手で、しょうがいのない人たちとの暮らしの中で、その速さについていけないと感じる者がいると判明した。

仕事に就いている人のグループで何らかの共通性を見つけることは難しかった。仕事をするにあたり、より好ましい生活環境や、やりやすい生活環境というものは特になかった。過保護的な核家族の中で暮らしている人は、グループホームで暮らしている人や自立生活している人に比べて、家族との衝突がおきやすいとい

う結果が出た。しかしながら、家族は、子どもが仕事しやすいように家族の暮らし方を調整し直し、グループホームでも、仕事をしている人がやりやすいようにスケジュールを調整していた。結果的に、仕事を持っている誰もが、生活環境が悪くて仕事がしにくいということはないといえる。

グループホームにおいて、ウェントウッド校の卒業生のみが、仕事を持ち、職場まで1人で行けるようになったことは注目に値する。仕事をやめた卒業生は、そう望んだからであり、意思に反して辞めさせられたということではない。仕事についている人はすべて、仕事を楽しんでいるように見え、職場でもよい評判を得ている。幾人かは職場体験からそのまま残り仕事を続け、中には5年間同じ仕事を続けている人もいる。

例外としては、既婚の職場のマネージャーと長い間関係を続けていたことが発覚したとき、クビにされた1人の女性の例があった。グループホームの女性マネージャーは、その女性が利用されたことに悩み、その上2年間務めていた職を失ったことに怒り、相手の男性もクビになるべきだと裁判所に訴えた。その女性はそのことが原因で、何か月ものあいだ、一対一の心理カウンセリングを受けた後、似た別の職場を見つけ現在は満足している。

仕事についている人は、職種は何であれよくこなしており、職場でも問題を起こしていないことは明らかである。特に興味がもてるのは、職種に従って特別の訓練を受けている者はほとんどいないということである。多くの職業は、メンキャップの社会復帰移行のためのワーカーや継続教育を通して紹介された。だが、これらの仲介者はサービス産業や菜園の範囲のみ可能と考え、これらに対する職業訓練プログラムが作られていた。その訓練プログラムは、手作業に集中し、彼らの昇給に影響を与えるものではなかった。金銭管理の技能は、抽象的で買い物とだけ関連付けて教えられるのである。

卒業生たちが仕事に必要なことをどうやって学んだのか尋ねたとき、返事は一様に、「ただやりました」だった。彼らに何をすべきか、どうやって分かったか尋ねると「なんとなく」と答えた。このやり取りは、ワーカーとの間でも同じであった。雇用主は、しょうがいについて、ほとんど知識がないということもあって、他の従業員と同じように卒業生たちを扱っていたようだ。そして、他の従業員と同じように自然に覚えた、という。

似たような事例として、精神病院に入院していた患者たちがグループホームへ移転したケースが報告されている。彼らは、何の問題もなく、地域の村で働いていることが分かった。昔、精神病院で働いていた役人は、他の労働者たちと精神しょうがい患者とを異なる扱いをする必要はないと言った。特別な教育訓練を受けて、現在菜園を経営している先生は、しょうがいのある従業員たちは、特別な訓練をしなくとも、適切な仕事が出来るようになったと語った。

雇用先や仕事の種類のリストはとても印象的である。コダック、マクドナルド、アルゴ、コープ、マリオットなどのホテル、菜園、老人ホーム、テレビ局、卵をケースにつめる仕分けをするなどである。最も驚くべきことは、部品取り付けを短期契約で行っている小さな会社で働いている若いしょうがいのある女性が、救命胴衣やラジオなどの幅広い部品取り付けを行っていたことである。

その他、仕事についた者でIQ30以下の人が１人いたが、大多数はIQが30〜45であった。２人は重度のコミュニケーションしょうがいがあり、ほとんど無言であった。また、ほとんどが、重度の言語障害であった。何人かのダウン症の人は、ほとんど聞き取れない話し方であった。これらのハンディキャップにもかかわらず、大多数は、適切な会話方法を身に付けていたが、何人かにとっては、社交上の会話は得意な分野ではなかった。

ほとんどの対象者には言語障害があったが、１人を除いて通訳は必要なかった。その１人でさえ、最終的には適切な場面で頷いたり首を振ったりする事ができるようになった。彼らが情報の間違いを防ぐために、親やスタッフとともに確認しながら集めた情報の正確さには驚いた。面接対象者たちは、広い範囲の仕事内容を答えられた。従業員たちは仕事のやり方や様々な休憩時間の説明をする事ができた。彼らは自分たちの仕事の日課、任されている仕事の説明をすることができた。マクドナルドで雇われた人たちも毎週のスタッフミーティングに参加し、組織の上下関係を知っていた。給料をもらっている人の中でほとんどが、いくらもらっているのか、時給がいくらなのか知っているものはほとんどいなかった。何人かは時給が高すぎて補助金に影響が出るので、２〜３日しか働いていなかった。正規の１週間の給料を受け取ると、働かない人より財政上不利になる。グループホームに住み働いている人たちは、住居手当など彼らの法的特権を失ってしまうため、すべての給料を受け取れなかった。

重要な論点

通勤技能と仕事の機会との関係

仕事についているしょうがい者のグループに共通して言えることは、３つの技能のうち移動性が非常に高いということである。彼らは、バスを乗り換えたり、バスに乗るために道を歩くなどの、通勤中に自然に移動性技能を身に付けることができたという事実が判明した。１人の女性は、仕事に行くためにタクシーに乗る。なぜなら、週２日仕事で清掃をする郊外の大きなホテルまでのバスがないからである。別に調査したところによると、週の残りの日は、ボランティアで働くオックスファムにバスで行くことができる。郊外に住む別の女性は、公共交通機関がないため両親に仕事の際に送ってもらっていた。親やスタッフは、仕事についている人はみんな緊急時には別の手段で通勤する事ができると確信している。

ウェントウッド校のカリキュラムは、卒業後の生活に役立つように、徒歩、自転車、バス、電車などによる移動性の向上に焦点が当てられていたことが明らかになった。このような訓練がなければ、親は自分の子どもをひとりで外出させることはできなかったと明言している。グループホームでは、ウェントウッド校のような１対１の徹底した訓練を行うための人も時間もなかった。しかしながら、もし外出の経験があれば、自分自身で通勤できると確信できるまで、スタッフが通勤の練習に時間を割いていた。

仕事についている人たちは、他の卒業生と比較して、学業成績も体力も優れているということはなかった。彼らは卒業時にはほとんど金銭管理能力をもっておらず、金銭管理に関して理解していたことをも忘れてしまっているようだった。卒業時、彼らは、金銭管理能力よりも、時間を告げたり、時間の経過を理解するなどの能力が劣っていた。このグループのほとんどが卒業時の時間に関する最終成績が０点であった。

仕事についている卒業生たちは仕事についていない人たちよりも、時間に関する技能がかなり上達した。仕事に行くために目覚ましをセットし、決められた時間に仕事に行って帰る、正確な時間に乗るべきバスに乗る、昼食やお茶の時間はしっかり取る、これらの必要事項には意識を集中することができるようだ。

金銭管理

毎回インタビューの最後に尋ねる一般的な質問の１つに、やりたかったけどできなかったことは何か、また、スタッフや家族が許してくれなかったことはあったか、ということがある。ディズニーランドへ行くことや彼らのお気に入りのポップスターのコンサートに行くような答えが予想された。彼らの生活に影響を与える制限の有無を考えてもらう機会を提供するためにこれらの質問を行った。仕事についている人もいない人も同様に、金銭管理が苦手で、特におつりの計算が出来ない、そして、外出時にはとくに自分たちのことをひどく愚かに思うと述べた。金銭管理の技能に関しては、彼らは自らの限界を認識するだけの適切な理解力があることが分かった。